鵜野　光　埼玉
大河内正夫　大阪
山田史郎　岐阜
木村重徳　東京
宮脇憲三　兵庫
守谷玉雄　宮城
森本　宏　山口
杉本善男　新潟

⑤ 各科生徒級別現員表

昭和十五年四月一日

区別		予科	第一年	第二年	第三年	第四年	計	研究科	小計
日本画科	本科	二一	二〇	二〇	二〇	二〇	一〇一	〇	一〇二
	特別学生			一			一		一
油画科	本科	三五	四〇	三三	三四	三八	一八〇	四	一八九
	特別学生		一	一	三		五		
彫刻科	本科	一三	一二	一五	一七	一四	七一	一三	八六
塑造部	特別学生			一		一	二		
彫刻科	本科	八	七	七	八	六	三六	五	四一
木彫部									
工芸科	図案部	一八	一八	一五	一四	一四	七九	二	八三
	特別学生	一			一		二		
	彫金部	五	六	四	五	五	二五	五	三一
	選科			一			一		
	鍛金部	四	四	四	四	二	一八	二	二〇
	鋳金部	五	六	九	五	三	二八	二	三一
	特別学生			一			一		
	漆工部	七	七	六	七	五	三二	一	三三
建築科	本科	八	八	七	八	七	三八	〇	三九
	特別学生		一				一		

⑥ 依嘱製作

図画師範科	総計	受託年月	完成年月	件名	数	依嘱者	製作担当者等
		15・2	15・3	花盛器	1個	馬政局	石田英一 外箱等黒川義勝
		15・5	15・7	賞牌	9個	日本学術協会 西成甫	佐藤省吾
		15・8	15・12	教育勅語渙発五十年記念表彰木杯	5521個	文部大臣官房会計課長	図案　森田武 監督　津田信夫 同　山崎覚太郎
		15・6	15・3	青銅灯籠及び花瓶	1基 1対	岡田正吉	丸山義男 内藤春治
一二五	一七						
一四七	一六						
一四一	一七						
一四三	五〇						
一一五	三四						
六七一	七〇五						

⑦ 澤田源一校長就任

昭和十五年五月二十九日、芝田徹心が校長を辞任し、澤田源一が校長に就任した。澤田は明治二十一年六月九日生まれ。同四十五年七月東京帝国大学法科大学政治学科を卒業。内務省、次いで文部省官僚としての道を歩み、昭和二年八月より高松高等商業学校長を、次いで同十四年四月より浦和高等学校長をつとめた。美術との関係について言えば、大正八年九月から同十年八月まで文部官僚として帝国美術院幹事をつとめたことと、本校卒業生にして京都の陶芸家として名を馳せた澤田宗山がその兄にあたるということが挙げられ

る。宗山は本校の元校長正木直彦と大変親しい間柄であったが、彼は京都の澤田文二（澤文）の長男で、源一は三男であった。

左記は澤田が新任校長としての所感を述べたもので、『東京美術学校校友会誌』第十九号（昭和十五年十月発行）に掲載されている。

所　感

澤　田　源　一

我が日本の國土は太平洋を南北に貫いて蜿蜒千數百里に亘り、寒さの嚴しい地域や暑さの酷い地域もあり、時には急激に猛威を振つて忽ちにして過ぐる颱風の如きものの襲來もあれば、連日陰欝なる空の打續く梅雨季もあり、又世界に餘り比類のない程に積雪の多い地方もあれば一方には亞熱帶の植物の繁つてゐる海岸もある、といふ風に氣象氣候の變化が甚だ多いのであるが、併し一般的に言ふならば概して溫和であり、四季順正に循行し來つて、櫻花の爛漫たるあり、眼も醒むるばかりの新綠や紅葉の美も展開せらるるのである。又夏季に雨量の多い我國は所謂瑞穗の國であつて自然に米作に適するのみならず、地勢の多種季節の變移等の爲に野菜にしても果物にしても其の種類極めて多く、又我國土を環る海洋は實に魚類等の水產物が豐富であつて、食物には不自由がなく非常に潤澤である。されば此等天惠の諸條件が我國民性に至大の影響を有することは當然であつて、我國民の性格が、素より地方地方によつて夫々特異のものはあるけれども、概ね勤勉、勇敢、進取、敏捷等の特質を有し、慘忍を忌み仁俠を尊び、義心を藏して慈愛に富み、穩健宏量にして優雅簡素を好み、不偏中正にして反省包容の性を具ふる等、多くの長所を有することの寔に偶然あらざるを思ふのである。

又我國土は地理的には東西兩半球の中央に位して歐米と亞細亞の東西兩文明の融合渾和に極めて適はしい地位を占めてゐるのであるが、悠久の古より、人類の最も有りのままの姿なる家族を根幹とするの國家を成し、遠き肇國より世界に比すべきなき一君萬民の皇國體が建てられ、古來今日に至るまで、恆に外より優れたる宗教、道德、哲理、藝術、科學等あらゆるものを攝取吸收して之を本來の性格に同和醇化し、惟神の大道を彌々榮ゑしめつつ、生成發展、天壤と窮り無き理想を追ふて今日に至つたのである。

斯の如き我が國土の天惠、我が國柄の尊嚴、我が國民性の優秀等を稽ふるならば、我が日本が世界的の大使命を持つてゐるといふことが、我々日本人には自然に明確に意識せらるる筈である。卽ち世界の思潮、東西の文化を圓融渾一して而も彌々夫を發展せしむるの大使命を有するものは實に日本國民を措いて他に無しと信ずること必ずしも不當にあらずと思はるるのである。

併し乍ら私は、我國民が此の天賦の大使命を達成するには、是非とも眞に之を達成するに足るの實力を有せねばならぬと思ふのである。卽ち我國民を措いては此の使命を完ふするもの無きことを世界に納得せしむるに充分なる本質、眞價、力量を我國民が具備するといふ事實が何よりも必須の要件であらねばならぬと信ずるのである。それは決して空想であつてはならぬ。大言壯語の類や獨善自ら醉ふの類であつてはならぬのである。眞に此の世界的使命を負はさるるに足るの德と力とを我國民が具有するのでなけ

ればならぬと信ずるのである。玆に實力と言ふは國民の體力や智能や情操や德性等の凡てを謂ふのであつて、國民各個の體力、智能〔ママ〕。情操、德性等が統合せられ組織せられて、國の武力となり、經濟力となり、文化の粹となり、道德の精髓となるのである。それが所謂國民の實力換言すれば總力である。國民に眞の德なくして徒らに自負し、眞の力量なくして空威張するが如きことは許さるべきでない筈であるから、天が此使命を果させる爲めに下したる吾々日本人は、常に其の天賦に應ふるの實を有せざるべからずといふ敬虔なる反省を以て、信條は實踐と一體となり、事實が理想に副ふて顯現せらるることに努めねばならぬのである。然らば最も眞劍なる問題は、果して現在の吾々日本人が此使命に堪へ天賦に應ふるの實を有すると信じ得るか否かの點に存するのである。若し吾人が虛心坦懷に自ら顧みて忸怩たるものがあるならば、それこそ大に自ら戒め自ら改め、肅正、鞭韃、精進して、眞に其の實を備ふるべく專念努力することが最緊要なのである。是こそ嚴然として今吾々の前に存在する大問題なりと信ずる。而して私は二三の觀點より現代の吾々日本人が此大任に應ふるに足るや否やを省察して見度いと思ふ。

凡そ國の力は其の人口、國民の資質、其の天然資源等に負ふところ極めて大なるものがあり、人口が少いとか國民の資質が劣つてゐるとか天然の資源に乏しいとかいふやうなことは非常に不利であることは論を俟たぬが、我國の人口並びに其の增殖力は悲觀するに及ばぬ狀態であり、又天然資源は若し滿支其他東亞の所謂共榮圈と協力するならば極めて有望である。然るに我國民の資質の內殊に其の體力といふ點については大に遺憾なるものがあるやうに思ふ。

近時我國民の體位が次第に低下しつつあるといふ事實は徵兵檢査等によつても證せられ、又國民各層に結核性疾患が非常に多いことが明かにせられてゐるが、此等の事實は之を如何に觀るべきであらうか。近年體育が奬勵せられ、武道の振興、スポーツの隆盛、寔に眼醒ましいものがあるに拘らず、斯の如き憂ふべき狀態にあるは一體何に因るのか。私は若し武道やスポーツ等が今日の如く奬勵せられてゐなかつたならばもつと惡い結果を見たかも知れぬと思ふのであるが、之は現代の日本國民の生活の方法や內容に多くの缺陷がある爲であると思ふ。衣食住が不合理に營まれたり、體練衛生の指導や施設が不徹底不完全であつたり、種々の事情によるであらうが、その源は政治、教育、厚生の各部面に於ける指導が正しく強く行はれなかつたによるとも見らるるのである。今此等の原因の探求は問題としないが、何は兎もあれ是非とも國民の體力を增進し、其の水準を高め、強靱旺盛なる肉體を有する日本人を次代に作らねばならぬことは我國當面の最大問題の一つであると信ずる。國民の體力の問題は國防とか產業とかいふ見地からは勿論、其他あらゆる分野に於ても最も切實に考究さるべき緊急問題である。學問にしても藝術にしても眞に精深、雄渾なるものを生み出す爲には國民各自の體力が強健でなければ到底望み得られぬと確信する。

今次の事變に於て拔群の武勳を樹ててゐる人の內には、武道に達した人が非常に多いといふことである。又重い軍裝を背負つて

十里二十里の嶮道を進軍する際に其の難行軍に堪へずして落伍し、爲に殘敵に襲擊せられて戰死したといふやうな事例も聞くのである。斯の如き事實は、戰場に於て體力の優劣が個人としても亦部隊としても如何に重大なる幸不幸を分かつものであるかを知るに足るのである。而も體力の問題は啻にこのやうな戰場に於ける場合等に限らず、平時の如何なる職場に於ても、如何なる活動部面に在つても、事の成否勝敗を決する一大要件たることを否むを得ないのである。世に虛弱なる人にして而も天與の才能を遺憾なく發揮したる人は無いではない。併乍ら若し其の人が強健であつたならば更に大なる天分を顯はし得た筈である。天才は假令不健康なる體の持主である場合にも現はるることがないではないが、不健康或は病弱なるが故に天才が發揮せらるる事例があると爲すが如きは曲庇したる觀方であつて正しくない。學問でも藝術でも眞に偉業大作を成し遂ぐるには健全なる體の持主であることが必須の要件なりと信ずる。軍人、政治家、事業家等に體力が如何に重要なる成敗を決する條件であるかは素より明かであるが、學者や藝術家に於ても亦同樣に體力の優れてゐる者がその劣れる者に勝つことは必然である。此事を思ふならば我國民の現在の體位の低劣なることは日本國民の大使命に鑑みて洵に痛嘆すべきことの一つなりと思ふのである。

次に國民の資質といふことは素より體力だけのことではないのは勿論であつて、國民各個の智能の優れてゐることや研究心の旺盛であること等も實に國家將來の興隆を決する一大要素である。私は近時我國民の一部に、我國の文化、我國民の力量に對する自惚が著しくなつて來たやうに思はるることは大に警戒すべきことでなからうかと思ふのである。我國民は本來趣致に富み、雅味を解し、侘とか寂とかいふことのわかることに於ては恐らく世界に類稀なる秀でたる性格を持ち、又頭腦も技術も優れた國民であることは疑を容れぬところであり、古も今も其の例は夥しく存することも事實である。文學にしても藝術にしても東洋的なる氣韻や雅致に富めるものを持つのみならず、特に日本獨自の秀でたる精神を有するのである。殊に又明治以降は歐米文物の長所を取入れて、學術が長足の進歩を遂げ、軍備も充實し產業も增強し、固有の精神文化と共に見事なる科學文明を成立せしめたる先輩の貢獻は實に感謝せねばならぬのである。併乍ら近時、日本精神の昂揚、國力發展の顯著なる事實に眩惑したとでも言はうか充分なる反省なくして只何事でも日本のものが凡て他國のものよりも優れてゐるといふが如く誤信し誇張し自惚るるの傾向が生じて來たやうに感ぜらるるのであつて、之は大に戒心せねばならぬのではなからうかと思ふのである。

明治以來西洋物質文明の急激なる流入によつて、歐米文化の皮相にかぶれ、古來の立派な我が傳統を忘失せむとするの傾向があつたが、幸にしてその危機を防止し日本古來の文物の優秀性に對する再認識に眼醒めたことは寔に仕合はせなことであつた。又度々の戰爭には大勝し、經濟力は國外に發展し、僅かの歲月の內に世界の強大國の列に入つた驚くべき躍進力は實に日本人の誇とするに足ることであつた。けれども此の認識、此の自尊が、行き過ぎて、近頃では何でも日本が歐米や支那よりも優れたものを持つ

てゐるのであり、何事によらず彼等を凌駕したのであるといふが如き自惚を生じて來た部面が方々に存在するやうに思はるるのである。併乍ら具さに檢討するならば歐米文化の眞諦には非常に深味のある尊ぶべきものが多いのであるに拘らず夫等の點を閑却してゐる嫌が無いではない、加之西洋の文物制度習慣を取入れた内には反つてその内容の長所を自得せずして外形的な短所を眞似て得意然としたやうな憾もないではないのである。

又日本が長足急激に進歩しつつあるのは事實であるが、進歩してゐるのは日本のみではないのであつて、こちらの進んでゐる間に彼等も亦進んでゐるの事實を忘れてはならぬ。之は必ずしも所謂物質文明とか自然科學とか、技術とか產業とかの方面に限らぬのであつて、思想とか信念とかいふ所謂精神文明の方向に於ても亦同樣であり得るのである。此際吾々は國粹に對し深く省察すると同時に他國文化の長所を輕視するの態度は微塵もあつてはならぬと思ふのである。如何なる事についても自惚は禁物である。世界に先行し、東西を統合する學問や藝術を樹てるには、本然に對する自省と共に謙虛なる心を以てする不斷の研究と努力とを必要とすると信ずる。殊に近時又もや明治初年の西洋模倣の二の舞に似て、我國體や我國史や我民情に副はぬやうな西洋の新體制の顰みに習はむとするの傾向がないではないが、是亦愼み深く顧念せねばならぬ事柄である。此等の事たる日本人全體の心構として、現時最も大切なることとであるが、同時に又吾々は個人としても同樣の事につき大に自省戒心すべきものがあると思ふのである。

次に私は、國民の正義心が熾烈なりや否や國民の間に如何に道德が實踐せられありやといふことが、國家興廢の氣運國民資質の優劣を判定する大なる指針なりと思ふのであるが、近時我國にも只力と略とを絕對的なるものと爲すが如き傾向なきにしもあらざることは大に愼戒せねばならぬことであると思ふ。現時の世界の情勢を觀るに、國際間には只武力と謀略との葛藤あるのみであつて、其の強くして巧なるものが最後の勝利を獲るといふが如く客觀的情勢が見られないではない。であるから國家として國際場裡に處するに當り、正道を踏み仁義を以て進むが如きことは迂遠も甚しいといふが如き考へ方が存するやうに思はるるのである。かかることが個人にあつても亦正義を顧みず術策を以て糊塗するを利とするが如き傾向を生じてゐないでもないのである。併乍ら斯の如きことは果して承服すべきことであらうか、是認せらるべきことであらうか。

今日の如く國際關係の複雜にして世界の到る處に危險が包藏せらるる大轉換の時機にあつては、何物をも恐れぬ強大なる武力を備ふる一方、深謀大膽なる謀略の必要なることは論を俟たぬ。何國をも壓し得る軍備を保つと同時に國力を總動員し氣魄の旺溢したる大策を以て臨むことが緊切である。けれども私は、國際間に於ても決して力と謀とによつてのみ最後の勝を齎らし得ると思ふのは誤なりと信ずる、若し聖なる理想なく正義の信念なくして力を用ひるならば、たとへ一時は力によつて他國を屈服せしめ得ても必ずや又力によつて報復せらるるの時が來るであらう。謀略や軍備のみについては、いくらでも巧妙なるものや強力なるものが出現し停止するところを知らぬのみならず、永久に焦燥と不安と

を連續せしめ譎詐と慘害とを增大せしむるのみである。歷史の證するが如く、力と謀とにより策と略とによつては眞の平和は齎らされず眞の樂土は望まれぬのである。誠を以て人心を把握するにあらずんば永遠なる國運の發展は期し得ぬのである。而して我日本こそが眞に其の實證を立てねばならぬのであつて、それが皇國の天業なりと信ずる。八紘一宇の我肇國の大理想は德により義によつて世界を我國威に光被せしむることに存するのであつて、それは決して力や謀にのみよつては完遂し得られぬのであることを悟らねばならぬ。卽ち國民が本當に德を具へなかつたならば萬邦を我國光によつて被ふことは望み得ないのである。

然るに甚だ悲しむべきことであるが、聞くところによると現に聖戰半ばの今日、支那に入つて居る多數の邦人の內には、相剋によつて醜狀を暴露し又は不行跡にして支那人士の顰蹙を買つてゐる者があるといふことである。勿論多數の內の少數者の所作ではあらうが、かくの如きことがあつては果して抗日思想を絕滅し日支提携の實が期待し得らるるであらうか。又建國旣に數年を經て王道樂土の建設に步を進めつつある滿洲國に於てさへ、日滿兩國有識者の獻身的な熱誠努力の寔に多とすべきものあるに拘らず、一面には日本人の面目を潰すが如き征服者的亂暴を敢てする者が未だに絕へないといふことを聞くに及んでは實に慨嘆に堪へぬのである。斯の如き事例が根絕せらるるにあらずんば、東亞新秩序の建設も日滿支親善の樹立も甚だ覺束なく更に世界平和への大理想を顯現すべき我肇國の使命の達成は期し得られぬことを惧るるのである。此點は實に我國民がお互に大に自肅自戒せぬばならぬ急務中の急務である。

聞くところによれば、獨乙軍が巴里に入城したる後彼等の軍紀は嚴然として何等犯すところなく、大きな笑聲さへ愼むでゐるとのことである。若し彼等が待望の巴里を占領したことであるからその歡喜に乘じて驕慢なる振舞があつたとするならば彼等は間もなく巴里を失ふであらうが、此の肅然たる節制の下にあることを聞いては、恐らく巴里人は彼等を心より仇敵視しないであらうから、巴里は或は永く獨乙の支配に入るかも知れぬとも思はるるのである。又獨乙は占領地和蘭に獨乙人の入國を禁じ專ら和蘭人の生活を亂さない心遣をしてゐると言ふことである。言ふまでもなく、吾々日本人の心には義を重んじ敵を畏敬さへする武士道の精神、弱きを扶くる一視同仁の寬容なる日本魂が潛んでゐる筈であるが、獨乙軍の軍規の嚴肅なことや彼等が占領地の利權を尊重してゐること等と我同胞が滿支に於て擯斥せらるる者の居る事等を對比し、大に稽へさせらるる處がある。今にして反省するところがなければ、國の爲めに尊い護國の神となれる無數の英靈に對しても寔に申譯ない次第であると思ふ。

私は今日の波瀾重疊の國際間に於ても國家の進路には道義に立脚したる信念がなければ眞に國威の發揚は期し難しと信ずるのであるが、況んや國內の體制に於ては、道理を以て人心を悅服せしめ希望を以て民意を暢達するにあらずんば、眞の安定と團結は望み難しと思ふ。國民の生活の根底に眞理の確信があり、國民各自の心底に聖業遂行の熱望があつてこそ、始めて全國民が固き一團となつて艱難辛苦に堪へ欣然として全力を國家の爲めに捧げ得る

のであつて、この確信この熱望を澎湃として謚らせることが肝要である。

聞くところによると、ソ聯では、あのやうな國柄でもある爲めか、兵士が動員せらるるのは極めて祕密裡に行はれ、所謂歡呼の聲に送らるるといふが如き感激の光景が見られないそうであるが、而も彼等の多くは默々として忠實に職務に斃れてゐると言ふことである。愛國心は日本人のみが持つてゐるなぞと思つてはならぬ。又支那事變よりも數年も前から蔣介石は其の軍人に麻雀を嚴禁して居るのみならず其の所謂新生活運動は可なり徹底してゐたと聞く。その時分に我國には頽廢的な歌謠が流行してゐたのであり、今頃漸く學生に麻雀の禁令を出してゐるやうな始末であり、又所謂戰時利得者が勝手な振舞をしたり、一般に銃後の國內生活が緊張の缺けてゐる實例が寔に多いのである。我國は國內に食糧が豐富であり、戰場が國外にあつて國內に敵の攻擊を受けた經驗を持たぬ等の、餘りにも有り難過ぐる國情の爲めに、國民が思ひ上つてゐるのであつて、大陸に困苦と鬪つてゐる多くの同胞への感謝の念が犇々と迫らぬ爲めでもあらうが、實に相濟まぬ次第であるまいか。兎もあれ國際間に於ても道義仁愛に基く武士道的精神によるにあらずんば眞に人心を把握すること難く、國內にあつても正しい道理に立つにあらずんば國家的統制も國民精神の緊張も望まれぬのである。而して此事たるや個人の間にあつても亦同樣であると信ずる。

今や世界は史上未曾有の大變換期に際會し、現代の日本國民は同時に又我國史上未曾有の大事變を處理せざるべからざる大難局の眞只中に居るのであつて、眞に國運の隆頽興廢の岐點に立つてゐるのである。日本人の各個々々の覺悟と實踐とは建國以來の大理想を達成することの成否を分かつのである。然るに以上私が省察したるが如く、國民の體力に果して多くの缺陷ありとせんか、國民に自惚ありて其の實力に必ずしも萬全の信を措き難きものありとせんか、道理と仁義を輕視して只力と略とを崇むるの風ありとせんか、火の玉の如き國民の團結未だ成らざるの憾ありとせんか、正に速かに發奮すべきの時であり、反省と覺醒は急を要するのである。芟除すべき宿弊あり改變せざるべからざる禍根ありとすれば、次代を擔當すべき現代日本の青年たるもの、直ちに立つて自ら改め自ら戒むると共に警醒の鐘を打つて時勢を開き國家隆昌の氣運を促進するの先驅となつて貰はねばならぬのである。而して時勢を革新するの方途たるや必ずしも所謂電擊的にして多くの〔摩〕磨擦を生ずるが如きものたるを要せず、又過激突飛にして危險なる破壞的方法を選ぶべきではないのである。極めて穩健に地味に日常の生活を改善し工夫することによつて其の目的を達し得るのみならず、反つて冷靜に着實に實行することこそ合理的にして有効なる結實を齎らし得ると信ずるのである。

私は先に我國民の體力の上に大なる缺陷のあることを述べたが、此問題については種々の所說論議も立てられて居り、之が改善向上には幾多の方策があらう。私は之について特に研究してゐるわけでもないが、改善の方法は寧ろ極めて平凡な處にあるのであるまいかと思ふ。過勞や運動の後には安眠や休養が必要であり、早起きをするには早寢をするを要し、暴飲や暴食は愼むべき

ことであり、少しでも多く自然の日光と清澄なる空氣に親しむことが必要である、等極めて常識的の事にて足るのである。節制と同時に合理的の鍛錬を積むで、健全なる精神を宿すが如く健全なる身體を作ることに努むればよいのである。併乍ら言ふは易く行ふは難しで、日常の生活に之を具現實行するのは強い決心と克己と努力とを要するは勿論であるが、理窟はさほど六ヶ敷いものではない筈である。

又私は我國の文化や我國民の實力に對する自惚を憂ふる點を述べたが、我國民全體としての文化や力量に對する謙虚な反省と不撓の精進が必要なることは取りも直ほさず吾々各個人が智能や才幹に就ても反省と精進とが緊要であるといふことである。凡そ藝術や學問は人の天分に負ふ部分が多いことは言ふまでもないが、天分は之を研かずしては發揮せられぬ。僅かばかり天才に似たやうなものを有するとする慢心の爲めに伸びるべき人にして凡物に終るのが多い反面に、如何にも不器用不得手と思はれた人が工夫努力によつて大成したる事例も亦尠くないのである。かの性來咄辯であつたデモスゼネスが怒濤に對つて辯論の練磨を積みて大雄辯家となつた如き事例は藝術とか武道とかの世界には寧ろ非常に多いのではなからうか。鈍物と思はれた人が練磨研精によつて達人となつた例は仲々多いのである。魂を打込み夢寐にも忘れぬ底の發奮精進によつてのみ眞の天才が發揮せらるるのである。

現代の日本に於ける青年學徒たるものは、須らく日本固有の文化の眞髓を把握すると同時に、飽く迄も外國文化の長所をも吸收し、絶へざるの研究を爲すことが必要である。日本でなければ持ち得なかつた輝しい傳統を體得し、之が集成に貢獻したる先人の業績に感謝を捧ぐると同時に、清新にして偉大なる道を拓くに努むべきである。併乍ら新しいものの尊さといふものは決して過去の業績を破ることに存するのでなくして現在に到る迄の凡ての業績の上に更に一歩を進めることに存するものであること確認せねばならぬ。又創造とか創見とかいふものは絶對の意味に於ては有り得ないものであつて、歴史の發展と先人努力の結晶の上に更に夫れ等の内の最も卓越せるものを發見し顯現することが所謂創造であり創見であるといふことを悟らねばならぬ。卽ち極めて平凡のやうに思はるる溫古知新の工夫こそ最も大切なのである。

私は前に道理と正義とによるにあらずんば眞の世界平和も將來し得ざるが故に國内の團結も國際關係の打開も道と誠とが最後の鍵であるといふ意味の事を述べたが、之は個人が身を立て世に處するにも同樣であると思ふ。小理窟や小才によつては一時は人の眼を眩まし人の耳を奪ふことが出來るかも知れぬが、心の底より湧出づる叡智の働き至誠より迸る熱情の力によるにあらずんば眞に人心を服させることは出來ぬのである。小手先の技巧や器用なる才覺によつては假令當世の喝采を拍させることは出來ないでもなからうが、後代萬人を納得させるには精魂を傾到し神に通ずる眞心より出でたる仕事でなければ不可能である。藝術に於けるが如きは特に然りである。如何なる職業の人にあつても最も大切なるものは人格である。私はお醫者でも其人の學問や技量よりも寧ろ其人の誠意の信頼し得る方を選ぶ。商人にでも最重要なるものは算盤や懸引でなくて信用である。藝術家とか教育家とかも亦素

より然りである。敬虔なる心を以て作り上げた作品でなければ永く人の心を打たぬ、正しい考を以て仕上げたものでなければ心ある人の尊敬を受けぬことを私は確信するのである。

本年は神武天皇御即位紀元二千六百年の意義深き年である。我等の祖先は此の永き歴史の間に多くの優れたる不朽の藝術を遺した。我が東京美術學校は今や創立以來五十年を經、卒業生を出すこと既に四千餘、此等の人々も亦我美術界に偉大なる業績を遺しつつあるのである。現代日本の藝術に志せる學徒たるもの宜しく我國の世界文化史上に於ける地歩と責務とを自覺し、東西文化の融合渾和を使命とする日本が、現に成し遂げむとしつつある極めて困難にして而も實に意義重き聖業の大なる一翼の任を、遺憾なく果すことに全力を捧ぐべきであると信ずる。

崇高なる宗教、卓絶せる思想が如何に人類の生命に尊い靈の糧を與ふるものであるかは、釋尊や基督や孔聖等の教へられたる道が數千年後の現代に於て全世界の人類の心を強く動かしつつある事實によつて明かであり、大發明や大發見が如何に人間生活に大なる福祉を齎らしてゐるかといふことはニュートンやコロンブスやエヂソン等の遺業が現代の吾々の日常生活に及ぼしてゐる影響の大なるを思ふだけでも充分感得出來るのである。同樣に偉大なる藝術や優れたる文學が啻に其の巨匠文豪を生める民族に對してのみならず、全人類の精神を昂揚し、情操を豐富にし、其の勇氣を鼓舞し、其の文化を向上する力が如何に大なるものであるかは寔に測るべからざるものがあるのである。

今我東京美術學校に學びつつある諸君が各々其の志す道に精進し、藝術を通じて我國運の進展我國威の發揚に力を致し、肇國の理想達成に向つて各自の分擔を完ふせむと奮起せらるるならば、諸君の學窓生活は寔に意義深きものがあると思ふ。昨年ヒトラー總統はミュンヘンに於ける演說の內に彼の第三帝國建設の理想は啻に領土的に廣大なる第三帝國たらしむるにあらずして藝術と文化の第三帝國を建てるにありと言つてゐる。寔に味ふべき言である。領土、人口、資源、富、武器、此等のものは素より強大國たるに缺くべからざるものであるが、領土の廣大にして資源の豐富なる而も世界第一の人口を有する支那の現狀はどうであるか。世界の黃金の大半を保有する米國が果して最も羨むべき國であらうか。精銳なる無數の武器を一括して獨乙の鹵獲に委かせた佛蘭西の醜態はどうであるか。國家隆昌の要諦は此等の事物に存するのでなくして國民の魂にある。國民の魂とは、國民の燃ゆるが如き情熱と、透徹せる理念と、同一方向を指して一團となつて邁進する意力との綜合である。而して此の國民の魂を作るものは藝術、學問、教育の力である。獨乙でさへ其の理想は藝術と文化の第三帝國にありと叫んでゐる。世界に比類なき歴史を有せる皇國の世界的使命を思ふ時、藝術の學園に學びつつある現代の日本青年たる諸君の指標は自ら明かであり、諸君の日常は寔に生き甲斐あり、諸君の血潮は高鳴るであらうと思ふ。

私は先般乏しきを我東京美術學校長の職に享け、誠に其の任の重きを感じてゐるのであるが、職員各位や在校生徒諸君と共に我校半世紀の歴史を回顧し、先師先輩が我國美術の顯揚に盡された る事績に酬ゆべく將來への充實發展に專念協力せねばならぬと心

に誓つてゐるのである。日本の現狀には遺憾な事が甚だ多く又吾々には多くの缺陷があるけれども、お互に孜々營々として改善向上に努むるならば、必ずや理想に近づくことは出來るものなりと信ずる。生徒諸君に於かれても徒らに空疎なる想に墮することなく、遠大なる理想を翳し、恆に脚下を照顧しつつ、健實なる歩を進めて貰ひ度い。卽ち極めて卑近平凡ではあるが、絕へず健康に留意し體力の強健に努め、每日每日一歩一歩の研鑽工夫を積み、精神の修練と品性の陶冶に專心せられむことを切望して止まぬのである。

（昭和十五年九月十一日記）

澤田が本校校長に拔擢されたいきさつは不明だが、美術界に疎遠であったことと在任期が戰爭激化の時代であったことなどにより、苦慮するところが多かったと推察される。長男澤田隆治氏の話によれば、澤田源一は横山大觀を美術学校に招聘しようとして斷られたり、小磯良平を招聘しようとして文部省に挿絵を描いているような者を採用できないと反対され、非常に怒っていたことがあるという。また、戰爭中は教官も国民服やゲートル着用を強制されたが、源一は最後まで背広で通したという。左記は同氏の「父を憶う」（『追悼』昭和五十年、東京女学館）の一節である。

父は学生時代から可成りの勉強家であったらしい。戰災で家を焼かれるまでは、書庫に原書の蔵書を持ち後年私が想い出しても、あれだけの洋書を読み切ることは私には出来ないが、学生時代に既に読破して居たのであろうが、敬服に値する。

父は二度までも配偶者を亡くし、その点では決して幸福ではなかったろうが、良き両親に恵まれ、特に母親ぎんは仲々の偉丈夫でもあり、且つ賢母であったらしい。そうした母親の教育を受けつつ当時としてはエリートとして内務官僚となり、後、文部省に移って四十歳になるかならない内に勅任官となって旧制高松高等商業学校の校長として四国高松に赴任した。私がまだ学齢に達するかどうかの頃から私は東京に留まり、父は単身の生活を送る身となり、以来長きに亘って私共との別居生活を送る事となったのだが、その後旧制浦和高等学校、旧制東京美術学校の校長と転じて、専ら校長業をその職業とし、戰後東京女学館に招かれて以来、永眠するまで、即ち昭和初期から五十年近く、学校行政にその生涯を果たした事になる。

父の生涯に於て最も苦難な時代は、戰爭末期に当時目白の椎名町に在った家を戰災で焼かれ、殆んど無一物になって了った時であった。戰災当時私は軍籍に在った為、家に居らずその模様は知らなかったが、まだ焦土から煙が立ち上って居る頃に父を尋ねて焼け残った方の家に身を寄せて居る父に逢った。その時の悄然とした姿は殊の外哀れに見え、それまで何不自由なく順調な人生を生きて来た父にとって生涯で最悪の受難の時が暫く続く事になった。そしてやがて終戰を迎えるのだが、当時美術学校を去ってから近衞文麿公主宰する東亜同文会に一時奉職して居た為、生涯で初めて浪人の身となり、短かい期間ではあったが、更にその生涯に於いて強い打撃を受けることとなった。順調な環境で生きた

父、受難の時代に生きた父の生涯を貫いて居たもの、それはやはり自分のレールの上を唯超然と生きる事であった。

東京美術学校在職中、時折斯界での著名な先生方が家に来られ、美術については何の知識も趣味もない父との対話はさぞ無味乾燥で、先生方にもさぞお気の毒な思いをさせて居た事と思うが、それでも作品を頂いては応接間の壁に掲げたり、マントルピースの上に置いたりして、戦争がはげしくなるにつれ、空襲も度重なり幾度も薦められはしたが、遂に疎開しようともせずに最後まで自分の身辺に置いて焼き尽して了った。現在残って居たらいずれも大変貴重なものばかりであったが、頂いた方への感謝の気持で自分の傍に置いて居たのかも知れない。戦争中も当時の美術学校には自由な風潮が残って居り、当然当時の政府当局から戦争遂行に非協力だと圧力がかかり始め、相当数の教授の方々の整理が問題となり、校長たる父への弾圧という形で迫って来た。そんな状況の中でも私共には何一つ語る事なく、或る日突然その職を辞した。

私はそれまで何も予知する筈もなく、その日のラジオ・ニュースで辞任を知った。後で父の語るところによれば「芸術と云うものは自由の中でこそ生まれ育つものだから、自由な風潮がなければ美術教育と云うものは在り得ない。先生方に辞任して頂くことは、自分が校長としては出来ないから、先づ自分が辞めなければならなかったのだ。」と説明して呉れた事を憶えて居る。知識も趣味もなかった父が、美術教育に示した理解、そして殆んど生涯を学校教育行政に打ち込んで来た父としては当然ではあろうが、如何に苦悩したであろうか。当時の事だから生活の問題もあったであろうが、自分の主張、自分の主義を正しいと思い込んで絶対に貫き通そうとした態度が貫かれたのであるけれども、私共には容易に心境を打ち開ける事はなかった。唯一人冥想し、苦悩し、決断した。私には父のとった当時の決断と行動、それまでの半生の官僚としての人生を、自ら退官して、自分のレールを踏み外さなかった事は、私にとって今に生きる教訓となった。長いその生涯で、その職場で、共に働き協力頂いた方々にも本当に心の中を語ることがあったであろうか。それだけに色々と御迷惑も掛けたと思うのだが、それ以上に本人の苦悩は深かったと想像するのである。

澤田は昭和十九年五月二十日、本校改革が断行された際に退官する。その後一時期東亜同文会に勤務したのち、昭和二十一年に東京女学館理事、次いで理事長兼館長に就任し、同五十年二月七日に在職中死去。前出『追悼』はその人物を知る上で最もまとまった資料と言える。

⑧ 故正木直彦学校葬

昭和十五年三月二日、元本校校長、名誉教授正木直彦が死去した。本校はその功績に鑑み、空前絶後の学校葬を挙行した。また、正木が会長をつとめていた図画教育奨励会は機関誌『美育』第十六巻第五号（昭和十五年五月）を「正木会長追悼号」として発行。関係者十九名の追悼文と正木の履歴、葬儀および告別式の記事、写真を